

イタリア・フィレンツェ・ピストイア植木の村視察と ドロミテ・アルプス散策

賛花園 熱田 健

今回の海外園芸事情調査旅行は、イタリア・トスカナ地方フィレンツェ近くのピストイアというところにある、ヨーロッパ最大の規模を誇る植木販売会社ヴァヌッチ・ピアンテ社と、イタリア北部、メラーノ（ドイツ名、メラン）のメラーノ植物園視察を柱に、特異な景観と豊富な高山植物で有名なイタリアンアルプス・ドロミテ散策という事になった。

“園芸事情調査団”と云うタイトルの海外旅行とはどのような条件を満たさねばならないのだろう。花業会主催であるが、参加者は会員以外の方も多く、園芸関係従事者も多くはなく、日数も限られているので、調査というよりは見学乃至視察旅行に終始せざるを得ないのは判る。過去の例を見ると、花博や園芸博、植物園、市場、園芸業者の生産及び販売の施設、更にはバックトラリアル見学等、花業会ならではの、内容の充実した企画が目立つ。一般海外旅行に準ずる対象も当然盛り込む事になるが、過去2回、ドイツ、オーストリア、スイスのほぼ同様な企画に対しての評価は悪くなかったようで、再びプランナーの1人として協力させて頂く事になった。

高山植物のウォッチングが「園芸事情調査」に当たるかどうかはさておき、参加者の殆ど全員がそれを期待している事に間違いはなさそうである。今回はドロミテ・アルプスに的を絞る事にした。そして移動距離、場所もなるべく少なくして視察のための時間を多く取り、旅の充実を図る事にした。自然観察、特にそれが山岳地帯でなされる場合は天候のリスクがある。それらの諸条件を考慮に入れ、今回はベニス、フィレンツェとその周辺等を盛り込んだ。以下、日程に従っての報告になるが、資料は鈴木司氏の記録によるところが多い。

ユーロ高も影響してか、参加費用50万と高額になり、当初は予定数に満たないのではと心配したが、最終的には40名近い参加希望者になった。やや多過

ぎる懸念を憶えたのだが、旅行社の方で添乗員を2人にするのでこのまま決行したいとの事なので従った。やはりその影響は、特に食事の質に少なからず現れ、美食の国にしながら、連日不味いものを出される事になってしまった。

● 6月27日 ベニス（ヴェネツィア）から コルチナ・ダンベッツォ

26日朝成田を発ち、フランクフルト経由で夕刻ベニスに着いた。時差の関係で同日（サマータイム実施中で7時間遅れ）の到着、添乗員2名を加えて総勢39名の大人数である。部屋の案内だけで、小一時間もかかってしまう。

27日午前、サンマルコ広場と寺院、ドゥカーン宮殿、ヴェネツィアングラスの工房等を見学後、ゴンドラに分乗して1時間程の運河周遊を体験した。少ない時間ではあったが、16世紀初め、「アドリア海の女王」と呼ばれてヨーロッパの繁栄を誇った特異な文化都市の圧倒的な質感を目で見、肌で感ずる事が出来、海外旅行の醍醐味を早くも味わうことになった。

午後はドロミテアルプスのほぼ中央のコルチナ・ダンベッツォに向かって北上する。直線距離で160km



花の窓辺 コルチナにて

ほどになるが、前半は整備されたアウトストラダ（アウトバーン）で快適に走り、小一時間程でドロミテ山群の南端に入る。ドロミテアルプスのある南チロル地方はかつてオーストリア領だったが、第一次世界大戦後イタリア領となった。そのため道路標識なども2ヵ国語で表されている。車窓からドロミテアルプスの特徴的な山々が見え始める頃から雲が始め、コルチナ・ダンペッツォに着く頃には弱い雨が降りだした。それでも雲の切れ間に見え隠れする独特の岩山の屹立に歓声が上がりたりしていた。6時前、コルチナ・ダンペッツォのホテル着。

● 6月28日 ドロミテ・アルプス周遊

昨夜の雨はすっかり上がり、快晴の朝を迎える。ここは1956年冬季オリンピックで猪谷千春が日本人で初めて銀メダルを獲得した所である。ホテル、ペンションの周りは全て緑の牧草地とドイツウヒの森で、様々な花が昨夜の雨にしっかりと濡れて咲いていた。場所によっては、干草用に既に刈られてしまっているところもある。何種類かのカンパヌラを折り取って部屋に飾った。ベットボトルの花瓶に活けたそれは極めて水揚げが良く、旅の最終日迄ホテルの部屋を飾ることになった。

8時ホテルを出発。今日は終日ドロミテ・アルプス中心地を周遊して、ボルツァーノ（ボーツェン）に移動する。ホメガーニヨン山群、「ドロミテの真珠」と呼ばれているミズリーナ湖、有名なドライチンネの岩峰、ラバレド山群、セラ山群等々、次々に現れるドロミテ・アルプスの景観を心行くまで楽しんだ。ドライチンネ山麓やボルドイ峠は美しい高山植物が



ミズリー湖からドライチンネの岩峰を望む

多く、ウォッチングを楽しんだが、散策の時間1時間はやはり少な過ぎたようで残念だった。6時半、ボルツァーノ（ボーツェン）のホテル着。

● 6月29日 メラーノ植物園、サイゼルアルム散策

朝食後、ボルツァーノ市街及び朝市を視察。都会ではあるが、多くの家々が窓辺を美しい花々で飾っていたのが印象的であった。明るい市場はいかにもイタリア的で野菜もカラフルであった。

メランは通常のガイドブックには載っていないほどのイタリア北部のリゾート地である。メラーノ植物園は、オーストリア最後の美しい皇女エリザベスの避寒のための宮殿跡に2001年に作られたもの。12ha程の広さで、標高差100m程の緩急のある斜面を利用している。のり面、壁面の植栽は迫力があり、丁度赤オレンジのヘメロカリスが鮮やかだった。地中海沿岸のものから高山のものに至るまで、ほぼイタリア全土にわたる植物を収集して見応えがあった。

午後は、当初はボーツェンのロープウェイ（4本ある）で、山に登り半日の散策を予定していたのだが現地ネイチュアリストだというガイドの提案で、サイゼルアルムと云う処に連れて行かされた。ところが、1時間以上も走って着いた所は何と牧草保護のための立ち入り禁止地区であった。残念であったが移動に時間が掛かり過ぎたので、駐車場脇の小さな斜面での散策を余儀なくされたのだが、意外に多くの珍しい植物のウォッチングが出来たのは、まあ拾い物であったが。

● 6月30日 フィレンツェ

列車で4時間程のフィレンツェに移動。駅近くの中華料理店で昼食。種類も多く、味もまあまあのものだった。美食のイタリア旅行で中華料理が上位というのが何とも皮肉であった。荷物はホテルに直送してあったので、そのまま市内観光。ドゥオモ、ジョットの鐘楼、ヴェッキオ橋、ピッティ宮殿、ボーボリ庭園等々15世紀に開花したフィレンツェ・ルネッサンスの世界に入り込み、感動的な時間を過ごした。

6時にホテルでチェックイン。再び町に出て夕食後、シニョーリアル広場でクラシックのコンサートを楽しむ。有名なズビン・メータの指揮であった。立ち見であったためか、1人が貧血を起こし、倒れ

るというアクシデントが起こった。幸い、すぐに回復し大事には至らなかった。夕食後の自由時間とはいえ参加者の大部分が来ていたのに添乗員が二人共ホテルに戻っていたので、病院へ連れてゆくと言い張る。救護員との折衝が大変だった。

● 7月1日 フィレンツェ市内観光、

サンジミニャーノ

フィレンツェの代表的な芸術を鑑賞する。ミケランジェロの有名な傑作4体の彫刻があるメディチ家礼拝堂、ウフィッツイ美術館はポッティチェリの“ヴィーナスの誕生”、ダヴィンチの“3博士の礼拝”、“受胎告知”などの有名な名画の数々に陶醉した。午後は自由時間の予定だったが、全員バスで50km程の所の“美しい塔の街”と云われ世界遺産にもなっているサンジミニャーノに行く。中世そのままの街並みは正に自分が時代を遡ってしまったような錯覚を覚えるほどの美しい所だった。町を囲む城壁の所々に、ケッパー（蕾の塩漬は料理の飾りに使われる）が美しい花を着けているのを鳥居氏が見付けて皆に紹介した。



ケッパー *Capparis spinosa*

● 7月2日 ペスキア花市場、

ヴァヌッチ・ピアンテ植木会社

早朝6時にバスで出発し、ペスキアの花市場視察。鉄筋、一部半透明プラスチック張りの約2,000m²の建物で、周りにレストラン、冷蔵庫と100席程のオランダ式時計セリの部屋が併設されているが、これは現在は使われておらず、取引は所謂、相対で行われるとの事だった。床に既に取引の終えた切花、鉢物が残っていて、積み込み作業が続けられていた。



Cupressus sempervirens 'Pyramidalis'
「イタリア庭園の典型アイテム」0.4～7mの高さの苗を、
18サイズのポットに分けて植えられている

市場の食堂を借りて、ホテルで用意させ、各自に配っておいた鳥の餌状の朝食を摂り、いよいよピストイア村のヴァヌッチ植木会社に行く。しばらく走ると道の両側に植木の栽培地が続いてきて、植木村に入ったことが判る。

ヴァヌッチ・ピアンテ社に着くと先ずその広さに驚かされる。整備された園は、鉢物250ha、露地植250ha、この他に委託生産の圃場が250haあるという。生産樹種は2,000種、250名の従業員、125台のトラクター、4,000個の輸送コンテナ等々。三代目経営者のアントニーオ・ヴァヌッチ氏自らが園内の案内と説明をしてくれたのだが、聞くにつけ、その規模の大きさに感嘆の声がしきりであった。極めつけは1回の取引最低額は20,000ユーロ（約¥3,200,000.—）以上とのこと。出荷先、1位はフランス、2位ドイツ、3位イギリス、で以下スイス、オランダ、東欧、中近東にまで及ぶそうだ。記念に参加者全員及び花葉会幹事用として40冊ものカラー360ページ、ハード表紙のカタログを無償で提供してくれた。1冊1kg以上と重かったので、参加者に成田迄1冊ずつ運んで頂いた。

● 7月3日 帰国の途へ

ミュンヘンからのルフトハンザ機は、空調が壊れていて私共と前の列だけが異常に寒くて困った。殆ど満席で、前の二人は移して貰えたが、私と妻は毛布とお湯入りのペットボトルを与えられただけで成田迄の12時間を耐えねばならなかった。帰国後1週間、止まらぬ鼻水に悩まされた。